平和への思いを力に 班の行動ひろげて

「黙っていられない」と外へ

岐阜・可児支部さくら班

さくら班は、会員8人の班です。班の一番の願いは「平和」。10年以上地域で、平和展を開いたり平和についての話を聞くなどの活動をしてきました。

平和展では、「原爆パネル」や「高校生が描いた原爆の絵」に加え、関心があるテーマで調べたことも展示しています。これまでに地元空襲の記録、SDGs、平和の絵本の紹介、能登半島地震等、多様なテーマを取り上げてきました。「地元でも空襲で理不尽に命を落とした人がいる。こういう歴史は、知らなきゃいけないと子どもと見にきました」という人、平和の絵本への感想を寄せてくれた小学生など、毎年うれしい出会いがあります。今では、地区センター主催の「秋祭り」にも展示し、地域の人にも活動が認知されつつあります。

タペストリーなどを掲げスーパー前で行動

そんなさくら班も、以前は外への宣伝行動や仲間づくりは、「私たちの平和展を見て共感する人が自然に新婦人に入ってくれるんじゃない？」「新しい人を誘うなんて無理」「宣伝行動なんてできない」と一歩踏み出せずにいました。

しかし2022年、ロシアのウクライナ侵略を目のあたりにして、「黙ってはいられない」と地域のスーパー前で平和の大切さを訴えました。通りすがりにカンパや署名をしてくれ、勇気をもらい、徐々に宣伝ができるようになりました。

仲間づくりでも会員が地域で参加するサークル仲間2人を勇気を出して新婦人に誘うと、1人が入会。入会後、すぐに宣伝行動にも参加され、他の会員が励まされました。

これからも「平和な日本を」「地域で楽しく活動」をと、一緒に手をつなぐ仲間を増やして前進していきたいと思います。

班会・しんぶんタイム努力し、行動

神奈川・金沢支部谷津坂班

班は3つの小組があり、会員は18人です。班会がなかなか開けませんでしたが、月1回は班会をしよう！と昨年5月に相談し、人数が少ないときもあきらめずに続けてきました。会場や時間を変更したり、班ニュースやグループLINEをつくって班会の日時を知らせたり、みんながおしゃべりできるよう「1分間スピーチ」をするなど工夫しています。

1月は、昨年のチラシを見て産直運動で入会した人などの歓迎会や快気祝いをかねた新年会を7人で開催。会場に「高校生が描いた原爆の絵」を展示し、1部はお弁当を食べながら和気あいあいと自己紹介や近況報告をしました。2部はしんぶんタイムで1月25日号の被団協の児玉さんの記事と主張を読み、全員が1分スピーチ。「ほかの班は、原爆の絵展を開催しようとコミュニティーハウスを1カ月間予約したよ」「高校生の絵を見て、読み合わせしている小組もある」など支部委員会で出された他班のようすを伝えました。その後、「うちの班でも地区センターに要請にいこう」「小中高校にも行ってみたい。若い世代にこそ見てもらいたいね」「班会で毎回展示しよう」など、初めて具体的に「次にこうしていきたい」と話ができました。初めて顔を合わせる会員もいて、地域でつながれることの大事さを改めて感じました。

さっそく、高校生の原爆の絵の展示を地区センターにお願いすると、1カ月間展示してもらえることになり、グループLINEで報告するとみんな大喜び。「原爆展と小組紹介も入れたチラシを作って仲間を増やしたいね」と話し合っています。被爆80年、被団協がノーベル平和賞をとった時期だからこそ、班でやるべきことを語り合って行動していきたいです。

会場に高校生の原爆の絵を展示

主張

新婦人「春の行動」―学んで おしゃべり、仲間を増やそう

メディアで働く女性たちへのセクシュアルハラスメントや性暴力、その隠蔽が社会問題になり、さまざまな場で女性たちが被害を告発しています。新婦人は、3月8日の国際女性デーから4月10日の女性参政権行使日まで、女性の人権確立、ジェンダー平等めざす「春の行動」にとりくみます。

衆議院では選択的夫婦別姓に賛成の議員が多数になり、昨年11月に新婦人が始めた、ただちに導入を求める請願署名は、次世代国会行動や地元議員事務所への要請で紹介議員が70人を超えました。1月8日～22日にとりくんだアンケートには3979人が回答し、「名前は人権」「通称拡大では解決しない」など切実な声が寄せられています。署名と声をもって今国会で実現をと、全ての国会議員に迫りましょう。あわせて、女性差別撤廃条約選択議定書批准をはじめ性暴力とハラスメントの根絶などを求める署名や、地方議会への意見書採択のはたらきかけもつよめます。

班や小組で、女性差別撤廃員会の勧告について新婦人しんぶんなどで学びましょう。ゲストも誘って、選択的夫婦別姓、性加害、SNSのワイセツ広告、働き方など関心のあることで、しんぶんを読む会や多彩なカフェにとりくみましょう。都道府県に設置されている性暴力被害者のためのワンストップ支援センターや女性相談支援センターの実情について、行政機関を訪問し、聞き取りや懇談をしましょう。国際女性デーをはじめ、さまざまなとりくみの中で「新婦人で一緒に」と仲間を広げましょう。

聞き書き

母の歴史

3037

宮崎県　上西祐子さんのお話（7）

1971年4月、夫が宮崎市に転勤となり、新築の教職員住宅に入居しました。結婚後、3度目の引っ越しです。この団地にも新婦人の班があり、食の安全などが話題となり、生協づくりにつながっていきました。そして私は新婦人の会員の誘いで、無認可保育所「ぽっぽの家」で働くことになりました。

当時宮崎では、産休明けから入所できる保育所がなく、親たちの切実な願いでした。その願いを実現したのが「ぽっぽの家」。新婦人宮崎支部が呼びかけ、市内の労働組合や民主団体が協力して1968年頃に作られました。乳児が公立の保育所に入所できる4月になると、利用児は減少しますが、3カ月もすると次つぎと入所希望者が訪れました。お母さんたちの困った顔を見るとつい預かってしまい、保母を臨時に雇い、プレハブ小屋も保育室に当てるなどして、急場をしのいでいました。

〝無認可保育所に補助金を〟と市長交渉

宮崎市で保育所づくり

また宮崎市に対して、無認可保育所に補助金を要求する署名活動も行いました。必死な思いで集めた署名を持って市長と交渉した際、「この応接室はお客さまの来る所だから、子どもたちは連れて来ないでください」と言われ、子どもたちに対する一片の愛情もない発言に、私たちは心から怒りを覚えました。

つづく